

第 20 回 インダス文明とインドの思想

1 インダス文明

- ・インド地域はモンスーン気候に属し、雨季と乾季がはっきりと分かれている。
- ・北にはヒマラヤをはじめとする山脈があるため、閉鎖的な地域といえる。
→北西の（ ）を通過して、オリエント世界と交通可能であった。
- ・西には（ ）、東には（ ）という大河がある。



カイバル峠

標高 1070 メートルで、アレクサンドロス大王もここを超えた。現在は、徐々にだが交通網が整備されつつある。



インダス川

インド地域の西北部を流れる。現在の国でいえば、チベットからパキスタンを通過して流れている。いつか必ず行くつもり。



ガンジス川

写真は沐浴をするインド人。インド人にとっては聖なる川であり、生と死が交差する場所である。

☆（ ）（前 2600 年ころ～前 1800 年ころ）
中心地…（ ）・（ ）・ロータル・ドーラヴィーラー

- ・（ ）の民族が、インダス川流域に文明を築いた。
- ・焼きレンガによる細かい都市計画のもとに下水道、沐浴場、穀物倉が備えられた。
→他の文明に見られるような大規模な宮殿や陵墓は見つかっていない。
- ・（ ）に刻まれた（ ）が発見されているが未解読である。
- ・ろくろで作られた彩文土器、牛の像やシヴァ神の原型なども見つかっている。
- ・前 1800 年ころに衰退して消滅したが、原因はいまだ不明である。



モエンジョ=ダロ

シンド地方にある。昔はアーリヤ人の侵入によって滅亡したと考えられていたが、現在は否定されている。沐浴場があるのが重要。



ドーラヴィーラー

雨季には周囲が水で囲まれる城塞であった。インダス文明の遺跡の中では、比較的最近発見されており、これから出題が増えてきそうな遺跡である。



印章

インダス文字は、4～8 文字程度の短い文で見つかっておらず、解読が非常に困難となっている。

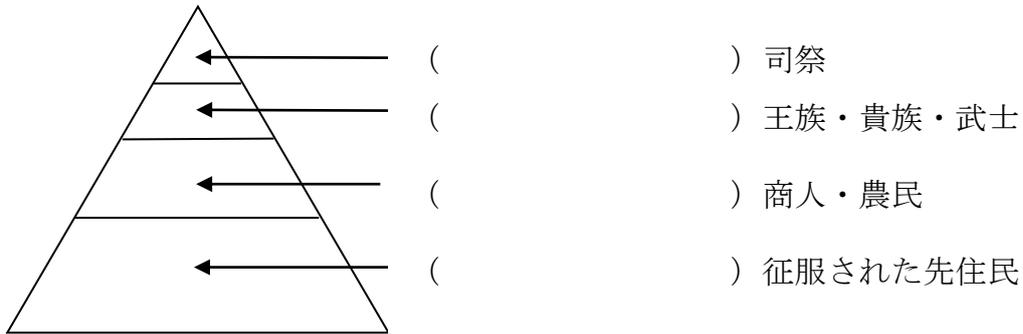
2 アーリヤ人の侵入とヴェーダ時代

- ・前 1500 年ころ、カイバル峠を通過して、インド西北の（ ）地方にインド=ヨーロッパ語系の（ ）が侵入した。
→馬と戦車によってドラヴィダ人などの先住民族を支配した。

- ・前 1000 年ころ、アーリヤ人は東の（ ）上流域に移動していった。
→そこに定住し、（ ）を用いて稲作などの農耕をするようになった。
- ・このころインド最古の聖典である（ ）が生み出された（ヴェーダ時代）。
※『サーマ=ヴェーダ』、『ヤジュル=ヴェーダ』、『アタルヴァ=ヴェーダ』などがあ
るが、神々に対する賛歌を集めた『 』が最古のヴェーダである。

3 バラモン教とヴァルナ制度

- ・アーリヤ人は、徐々に先住民とまじわり、農耕社会を形成するようになった。
→その過程で、() と呼ばれる身分の観念が生まれた。



- ・ヴァルナは、後に職業や結婚の制限と結びついて複雑化していった。
→これを() という。
※インドでは、「生まれ」を意味する() と呼ばれる。
- ・支配層のバラモンは、各種のヴェーダを聖典として、自分たちの権威を高めるために様々な儀式や決まりを定めていった。
→こうして形成された宗教を() という。



アンベードカル

- ・またカーストの外には、さらに() という身分があった。
→1950年にインドが独立した際、初代法務大臣の() は、
インドの憲法にカーストによる差別の禁止を盛り込んだ。
→しかしカースト制度に由来する差別は、現在でも根強く残っている。

4 インドの思想

- ・この当時、「肉体は滅んでも霊魂は死滅せずに、転々とほかの肉体に生まれ変わる」という() の考えが一般化していた。
→人々はそれを苦しみと考えていた。



これも元は、解脱を求める修行のひとつであった。

- ・何に生まれ変わるかは、生前の自らの行いである() によって決まるとされ、その行いそのものが輪廻転生の理由とされた。
→人々は、輪廻転生から() することを最高の願いとしていた。

< >

- ・前 800 年ころ、バラモン教の形式主義に対する批判として登場した。
- ・「宇宙の根本原理であるブラーフマナ() と、自我の根本原理であるアートマン() とが、実は同じものであるということ(梵我一如)」を悟ることで、解脱の境地に到達できると考えた。